

練馬区立小中一貫教育校推進委員会

第5回 推進委員会 要点記録

開催日時	平成20年1月24日〔木〕午前9時30分～11時30分
開催場所	練馬区役所本庁舎 12階 教育委員会室
出席状況	出席12名 欠席2名
傍聴者	2名
次 第	案件 議事録（第4回）の確認 小中一貫教育校の基本方針の検討 小中一貫カリキュラムの編成 その他 配布資料 ・練馬区の小中一貫教育カリキュラムの重視する事項（第2案） （資料1） ・「町田市の小中一貫教育（一年次報告書）」より抜粋（資料2） ・「武蔵村山市立小・中一貫校基本計画」より抜粋（資料3） ・小中一貫教育校に関する資料（資料4）

会議の概要

委員長

第5回練馬区立小中一貫教育校推進委員会を開催する。
まず、前回の議事録の確認をしたい。

事務局

議事録は事前に確認をいただき、手元にあるのは校正済みのものである。お気づきの点があれば、指摘いただきたい。ホームページ上で公開していきたいと考えている。

委員長

早速、小中一貫教育校の基本方針の検討に入る。
前回検討した小中一貫カリキュラムの特色について、意見、代案があれば願います。
特にないようなので、事務局で用意した資料の説明をお願いします。

事務局

（資料1～3に基づき説明 省略）

委員長

前回、小中一貫教育カリキュラムの特色について検討した。特色については、全体の意見として、練馬にふさわしい重要なことであり、各学校にも共通する必要な取組項目であるとのことであったと思う。前回の指摘を受け、考え方と編成方針の整理をし、説明をわかりやすくしていただいた。「特色」という言葉を「重視する事項」に変えたことについて、補足説明をお願いする。

事務局

素案の5小中一貫教育校の具体化に向けて(1)教育課程の編成の に「小中一貫教育カリキュラムの考え方」を挿入することになる。 に「特区認定と小中一貫教育校の特色」とあるが、この「特色」とカリキュラムの特色とがダブってしまうことになる。そのため、「特色」から「重視する事項」に言葉を変えた。

委員長

全体の流れもあるので、最終的にはまとめをする際に、整理をしていきたいと思う。質問、意見があればお願いする。

事務局

変更箇所の中で、(ウ)に「健康・体力の増進」という言葉がある。以前は、「健康・体育」ということであった。多くの区民の方々や学校関係者の方々がイメージし、理解できる言葉が良い。健康は保持増進、体力の場合は増進ではなくて向上ということになるかと思う。「健康・体力の増進」という言葉について、意見があれば伺いたい。

また、(イ)心の教育と(エ)キャリア教育については、「教育」という言葉を用いている。一方、(ア)は表現力の育成、(ウ)は健康・体力の増進ということで、その辺の整合性はどうかということもある。武蔵村山市は、言語力の育成、情報リテラシーの育成、キャリア教育、心の教育という表現であり、町田市は、規範教育、英語教育、キャリア教育、食育という表現である。

委員長

表現の統一を図ったほうがイメージがしやすいということもあろうかと思うが、何か意見はあるか。

最終的に、小中一貫教育校が教育課程を作っていく際の土台となるカリキュラムを作っていくときに重視すべき視点であるということであるから、言葉をあえて合わせなくても良いのかなという気もする。

委員

重視する事項については大変良いが、インパクトがない。小中一貫教育校の個性、たとえば英語力であるとかいったものがあると目玉になると思う。非常にバランスが取れていて良いと思うが、なんとなくインパクトに欠ける。つぎの段階で補完していくことになるのであろうが、スマート過ぎる感じがしないでもない。

事務局

英語活動については、学習指導要領に入ってくるので、この中には取り込んでいない。インパクトが欲しいということであるが、生きる力を支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を図っていくということからすると、確かにバランスが良すぎるということがあるかと思う。大枠としての小中一貫教育カリキュラムとして、この4点を重視して、実際に各学校で作成する教育課程の中でどこに重点をあてていくのかということを考えてとき、1つの学校ですべてをやっていくのは、難しいところがあるかもしれない。たとえば、表現力の中でコンピューターやパワーポイントを使って発表していく力について重点的に取り組んでいく中で、教育課程を編成できるように考えている。

委員長

重視する事項ではなくて、カリキュラムの考え方のところで、小中一貫教育校の取組のねらいとして、具体的にわかりやすく特色をもっと強く打ち出すということかととらえた。小中一貫教育校で教育課程を編成するとき、具体的に特色を出していくという考え方でまとめているのか。

事務局

そのとおりである。

練馬区は特区として進めていくわけではなく、あくまでも学習指導要領の枠の中で進めていく。小中一貫教育校がどのように教育課程を組んでいくのかということは、つぎの段階でこれをベースにしながらということ考えている。

委員

そういうことであるならば、カリキュラムの考え方とかカリキュラムの重視する事項ということではなく、カリキュラムを編成する上で重視する事項となると思う。カリキュラムの考え方となると具体的なものを思ってしまう。その前の段階の話であるということが、ここからは読み取りにくいと思う。

事務局

1番最後に一文つけ加えたが、うまく伝わらないか。

委員

見出しから受けてしまうイメージがある。

委員長

カリキュラムの中で重視するのではなくて、カリキュラムを作っていく際の重視すべき事項にしたほうが、先ほどの説明からいくとわかりやすいのではないかとのことである。

事務局

「カリキュラムを作成する際の重視する事項」ということで良いか。

委員長

それとも違うのか。中身なのか。そこのところがどうもはっきりしない。

委員

私は違うと思う。これは中身そのものである。教育課程は、学習指導要領に基づいて行われる。例えば、英語活動を小学校5、6年で行う。それは、現状だと学校に任されているので、中学校1年に入ってきた段階で非常に意欲的にやってきた児童もいれば、あまりやってこなかった児童もいる。教育の機会均等という観点から全国レベルで見ると問題であるということで、小学校5、6年は英語活動を行う。したがって、文部科学省が仮称英語ノートを編集して学校に配布する。おそらく、CD-ROMも音声も付いている。教師用の指導書もある。それを基本にして、全国一斉にどの学校でも行うことで、中学校に入ってきた段階で、どの生徒もわりと均一にやってきたということがある程度保証される。

教育課程は、学習指導要領に基づくものであり、それはそれである。それ以外に学校に任されている部分として、特別活動、総合的な学習の時間、小学校の余剰の時間、道徳の時間がある。教科書ではなくて、項目の定めはあるが、具体的に何をやるのかは学校に任されている。小中一貫教育校において、学校に任されている部分について、何をやっていくのかということで、この4つの項目について年間を通したカリキュラムを区のほうで作成し、それを実施していただくことになる。

したがって、この考えを基にその学校の100%の教育課程を考えるとということではない。教育課程は、学習指導要領を基に定めるものである。それとは別に学校に任された部分について4つの項目を重視して、道徳、総合的な学習の時間、特別活動の時間、小学校の余剰の時間を使って展開していただくという考え方である。

通常の学校でも、小中一貫教育校でも、コアというか中核的な部分は全く同じである。学習指導要領に基づいて、国、社、数、理、英という中学校9教科、小学校8教科のあの内容で、具体的には教科書が全く同じであり、それはそれでやる。ただ、教科書を使わない活動、例えば、道徳は学校が副読本を選んで区のほうに申請すれば、それを参考に使う

ということで支給される。特別活動には教科書はない。総合的な学習の時間も教科書がない。簡単に言うと、教科書がない部分は学校に任されている部分であるので、そういう時間を使って、提案している4つの内容についてやっていただく。その時に学校に丸投げするのではなく、区の実態からして、将来を生きる今日の子供たちにとってはこういうことが必要だという観点からこの4つを区のほうで定めて、その年間のカリキュラムを学校に任せきりにするのではなく、学識経験者も入れて内容を作成し、指導書やCDをつけて、やっていただくという考え方である。

委員長

学習指導要領とここでいうカリキュラムと各学校での教育課程と今回提案した練馬区の小中一貫教育校で何を明確にしてやっていくのかというところを基本的な考え方または基本方針の中でわかりやすくしないといけない。今の話がこの表現で読み取れるのかどうかというところがある。

委員

重視する事項ごとにカリキュラム作成委員会を設置するとバラバラな議論になってしまうのではないかと。表現力の育成は表現力の育成で考え、心の教育は心の教育で考えていくと、バラバラに検討されたものを持ち寄ることになってしまうのではないかと。

委員

練馬区はなぜこういうことをやるのかということの趣旨を説明することが大事である。したがって、この4つをバラバラにやるのではない。もちろん、第1回目は、一同に会していただいて、私どものほうから趣旨を説明する。それから、4名の学識経験者にリーダーシップを発揮していただくことになる。校長、副校長、主幹、教諭、専門性の高い方にも入っていただくが、4つがバラバラでやるということではない。学識経験者のうちの1人については、全体を統括する立場で、各4つの内容の整合性を図りながら、最初と途中と最後に確認するための会議を全体で行う。また、一般の学校の先生方や保護者の方に、説明会や報告会のようなものを開き、整合性や統一性を図っていきこうという見通しを持っている。

事務局

町田市の小中一貫教育カリキュラム作成委員会委員名簿を見ていただきたい。それぞれ委員会があるが、全体を統括する委員長が1名いる。それぞれが別々に最初からスタートするわけではない。

委員

具体的には、毎回担当の指導主事が事務局として出席する。その記録を集約し、毎回食い違いや流れとずれているところがないか、こういう点を1本筋を通さないと練馬区のねらいからずれてしまうのではないかと、といったことを微調整し、次回各分科会に提案し、軌道修正、方向の統一性を図っていかねばいけないものと考えている。

委員長

いかに全体のバランスをとるか、総合化するかということは、重要な視点である。

その前の段階で、ここだけ取り出しているのでは、全体が見えないところがある。

たたき台の小中一貫教育の内容では、学習指導要領をベースにして9年間を見通した形でとある。各教科についても当然 期、 期、 期の子供の発達段階に応じて、小中一貫教育校の中で教育課程を作っていくということで良いのか。

事務局

そのとおりである。

委員長

そうすると、今言った説明は、その後の5小中一貫教育校の具体化に向けて(1)教育課程の編成 小中一貫カリキュラムの編成の中で、やはり切り分けた説明がないとわからないのかなと思う。

今回の提案は、前回までは、特に細かく議論していない。新しく入ってきた中身であり、今回はっきりさせる内容である。事務局のほうでも、提案としてはっきりしないところがあるのかなとは思っている。それはそれとして、その辺の内容、整合性について事務局のほうで何かあるか。

事務局

小中一貫教育校を具体的に設置して、教育活動がスタートしていくとなると、学校としての教育計画が必要になる。学校の教育計画である。それが教育課程であると理解願いたい。校長先生の責任で学校が作るものである。

それから、今改訂が進められている学習指導要領、これは教育課程を作成していく上で、国の国として基準である。その基準はどこの自治体も同じである。この学習指導要領と学校が作る教育課程とを結ぶというか、それを作るための参考になるようなものがカリキュラムというふうに理解いただきたい。

今後、小学校から中学校への円滑な接続については、教科等の中で十分議論が進み、今後、学習指導要領の中で、示される予定である。小中一貫教育校を練馬区で設置していくにあたり、学習指導要領からすぐに教育課程を作ってくださいといった丸投げは乱暴であ

る。そこで、教科以外の領域のところ、練馬区の課題に着目して設けた重点項目をベースにして、学識経験者や専門家に入っただき、教育課程を作るための基になるカリキュラム、下敷きになるようなものを作成し、「どうぞこんなふうに進めてみたらどうでしょうか。」ということを示していく。学校が、それを基にしながら「本校は、もう少しここに力を入れたいんだ。ここの部分は、もう少し軽く扱ったほうが良いのではないか。」といったことを考えて、教育計画を作っていくのが教育課程であると理解いただきたい。3段階あるということである。

委員

町田市の規範教育、英語教育、キャリア教育、食育の4つは、見ただけでイメージがわく。それに対して、表現力の育成、心の教育、健康・体力の増進、キャリア教育といったときに、すごく大事なことであるということはあるが、具体的なイメージがわきにくい。それで、カリキュラムと言って良いものなのだろうか。

事務局

具体的なイメージがわきにくいということである。

確かに表現力という言葉自体に広い意味がある。前回の議論でも、ダンスなどが含まれるのではといったことがあった。これから学習を進めていく上で、非常に重視される部分である。思考力、判断力、表現力を子供たちに身に付けさせていくために、重視をしていかなければいけないこととして出てきている。したがって、小中一貫教育校で発達段階に応じて身に付けさせていくことが大切である。具体的な例を示したほうが良いということであったので、「体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現していくこと」、また、「総合的な学習の時間の中で、調べ学習等を進めていくことになるが、それらを整理して、考察し、まとめ、表現したりしていくということ」について、発達段階に応じて計画を立てていくことにした。

委員

学校を回って感じることは、児童・生徒、先生の発表力がないということである。昨日もある学校を回ったが、文字を清書させて、下を向きながら音読しているだけである。それは、発表ではない。音読というのは、書かれている内容をどの程度理解したのかを確かめるだけである。発表は、自分の考えを言うわけで、相手の顔を見て、適切なスピード、音量で伝えることである。自分の意見を言うことである。

大学や会社では、プレゼンテーションということで、自分をいかにわかってもらえるかということが大事な時代である。そういうときに、小学校のときから下を向いて音読で発表しているようではいけない。発達段階ということであるが、低学年であれば、3つぐらいの短い文で、言いたいことを言う訓練、たとえば、ノートパソコンやプロジェクターを

教室に完備して、調べたことを論理的に整理をして、簡潔なプレゼンテーションを行う。アメリカの小学校の授業などでは、Show And Tell を徹底して行う。自分の家から宝物を持ってこさせ、気に入っている点を皆の前で説明させる。そういった訓練を小さいころから徹底させる。

教室にスピーチテーブルを常備して、実物を見せて説明する Show And Tell であるとか、中学年、高学年では、取材をして、それを論理的にスピーチする訓練をすとかいったことを発達段階に応じて徹底的に小学校低学年から中学校までやることによって、将来必要とされるスピーチコミュニケーションや発表力を段階的に身に付けてほしいと実態から感じている。

委員長

編成上の視点、方針なのか、カリキュラムの内容なのか。

教科と領域という言葉があるが、学校で取り組む場合に、領域の部分という理解で良いのか。それとも、教科と領域は違うものなのか。

委員

現在では、領域という言葉は使っていない。教科等と言っている。領域という考え方はない。

委員長

教科等の「等」になるのか。

委員

「等」である。数学や英語が教科である。「等」のほうに、道徳、総合的な学習の時間、学級活動、余剰の時間が含まれる。

委員長

ここでいうカリキュラムはどちらであるか。

委員

「等」に含まれる。

委員長

「等」のほうとして作るという理解で良いのか。

委員

そのとおりである。

委員

これをやる校長の立場で受け止め、感じたことがある。

表現力の育成の中の「言葉」は、全教科がかかわる。「絵」は、美術がかかわる。「身体」は、体育がかかわる。「結果を整理し、考察し、まとめ、表現する」は、理科も社会もかかわる。いろいろな教科や「等」の部分、昔の領域の部分があり、いろいろな教科の方々が入って、表現力をどう育成するのかということを考えていくのであろう。そういうことを考えていただいた上で、校長が「これをやろう」と具体的に教育課程を編成していくという作業手順を思い浮かべた。そういうことからすると、先ほどの言葉の問題になるが、心の教育、キャリア教育の「教育」は少し広くて重いので、体力の増進や表現力の育成のほうがやりやすいと感じた。

それから、のカリキュラムの考え方のところに、「教科の円滑な接続」という一言を入れていただくと良いと思う。円滑な接続を図るのだけれども、練馬区としてはさらに4つの内容を重視するのだということを経長の立場で受け止めることができた。

委員

「どのような児童・生徒を育てていきたいのか」とある。また「児童・生徒の実態から必要とされる課題は何か、という観点から練馬区の児童・生徒が抱える教育課題に着目して」という文言がある。この4つの重視する事項について、実態をどのようにとらえているのかをそれぞれ明記すると説得力がもう少し出てくるのかなという気がする。なぜ表現力なのか、先ほどの話を聞いて、そう言えば本校でもプレゼンテーションの力を育てなければいけない、ということを感じた。それぞれの実態がわかると、さらに方向性がはっきりしてくると思う。

委員

私も賛成である。

たとえば、心の教育の部分のすごく大きな広いとらえが、実態を少し明記していただくことにより、もう少しポイントが絞られてくると思う。

たとえば、自尊感情の育成といった言葉に代わっていく可能性があると思う。ただ、あまり絞りすぎてしまうと、学校としてはやりにくくなりかねないので、その辺が難しい。

委員

本配布した前回の推進委員会の要点記録の3、4ページを見ていただきたい。前回、私のほうで、背景となる考え方でこういう経緯があるのでこういうことにたどり着いたと

いうことを説明させていただいた。このようなところから、本日のカリキュラムを重視する事項を整理して、ここに入れ込んでいく。そうすることによって、何のためにこういうことをするのかということを理解いただけるようにする。そういう方向性でよろしいか。

委員長

実態はなかなか難しいが、簡潔にわかる表現を入れ込んで、こういう取組をしていくのだという形にすると、理解しやすいのではないか。カリキュラムの内容はこれから検討するのでこれだけであるという縛りをするのが良いのか、これは重視するのでさらに加えるものがあればということになるのか。重視するということではなくて、カリキュラムの内容そのものになるのであれば、その辺の整理を最終的にして確認をいただくことにしたい。

事務局

カリキュラム、教育課程、教育課程編成といった言葉の定義をわかりやすく、イメージできるようなものがあると納得していただけたらと思う。

委員長

町田市では、カリキュラム（案）をベースにして、各学校で教育課程を作るとのことである。

規範教育カリキュラムに項目として出ている。この提案と資料の関係で、具体的に説明していただくと皆さんが理解しやすいと思う。

委員

町田市は、練馬区とは違う。小中一貫教育校は作らずに、全市展開で小中連携をさらに強めていく形である。一昨日、上石神井小学校・上石神井中学校で小中連携の工夫ということで発表があり、素晴らしい内容であった。どの学校でも具体的に取り組める実践を発表していただいた。町田市の場合は、小中一貫教育校は作らずに、全小中学校で強力な連携をしていく。その時にモデルとなる考え方を提案して、それを校長先生に渡し、学校や地域の実態に合う形で小中学校で相談して、取り入れられるところを取り入れていただくやり方であると聞いている。

一方、練馬区は、人の配置や施設、たとえば小学校5、6年には、数学、理科、英語の中学校の免許を持った専門性の高い教員を入れることや施設を一体型にすることまで考えている小中一貫教育校である。したがって、町田市の例とは異なると考えている。

事務局

武蔵村山市は、小中一貫校を作るとのことである。

委員長

このあとカリキュラム作成委員会を作っていくときに、町田市や武蔵村山市に関する資料に示されているものを作るのだという理解で良いか。

事務局

そのとおりである。

委員長

これをベースにして小中一貫教育校で教育課程を編成して、教育実践をしていただく。そして、その成果については、小中一貫教育校以外の学校の連携教育の中で活用していくということになるのか。

事務局

そのとおりである。

事務局

教育課程の編成は、学校長の役割である。

今、内容という確認が取れた。カリキュラムは、作成委員会で内容を固めていく。それを基に、小中一貫教育校が教育課程を編成する際に、重点的に入れていくということである。前回、文言は別にして4つの内容が重要な課題として良いのではないかという話があったと思うが、そういうことでよろしいか。

委員長

この4つについては各学校に共通する課題であり、取組項目としてはよろしいのではないかとということで、異論はなく、一致があったという理解をしている。

全体の考え方について、基本方針という形で提言をしてほしいということである。全体の流れの中で、わかりやすくするための工夫が必要かと思うので、事務局で精査をし、改めて確認をいただきたい。

事務局

先ほど、「教育」という言葉の意味するところが、少し広いのではないかとの意見があった。一方、規範意識のように絞り過ぎるとやりにくい面があるとのことであった。意見をいただいた上で、次回、再度提案させていただきたいと思うが、何か良い表現があればお願いする。

委員

今日参加させていただいた限りでは、特に疑問はなかった。言葉の遣い方や文言について意見が出ていたように思う。先ほどから「育成」や「教育」という言葉遣いについての意見があった。「育成」は、「育てていこう」というイメージがある。「教育」は、「教え込む」といった強いイメージをどうしても持ってしまう。「教え込む」のではなく、先生方、子供たちと一緒に親も含めて成長していこうということで、「育成」という言葉のほうが、丸みのある遣い方であると思う。文言に関しては、難しい面があると思うが、誰が見てもわかるような表現が良いと思う。

今日の校長先生や事務局の皆さんの説明は、すごくわかりやすかったので、良かったと思う。

委員長

「教育」という言葉に何か意味合いがあるのか。たとえば、「学習」という言葉に置き換えるとどうか。何か問題があるのか。「心の学習」というのはよくわからないが。

委員

「教育」というのは、教え育てることである。教えるべきところは教え、育てるべきところは時間をかけて待つことであり、両方含まれるものである。したがって、「教育」には、全部が含まれているものと理解している。一般の方は、どうしても「教え込む」といった印象を受けてしまうのではないかと指摘であるが、そういう面はあるものと思う。

ただ、難しいのは、単純に「表現力」、「規範意識」、「健康・体力」としても、「キャリア教育」は教育界で定められた専門用語である。「キャリア教育は、こういうことである。」という定義があるので、「キャリア」では、全然意味が通じなくなる。したがって、「キャリア教育」または「キャリア教育の推進」のどちらかになってしまうので、文言を統一することは、難しいという印象を受けた。

とりあえず、内容的なことでは皆様から意見をいただき、詰めさせていただき、最後のタイトル、文言の整合性については再検討の必要があると認識している。

委員長

カリキュラム編成と合わせて、学校経営体制、施設の整備、学区域の関係などを具体化して、最終的に小中一貫教育校の実施計画を作っていく際に、その都度、わかりやすさを精査しながらやっていくことになる。言葉遣いについては、案の中でもできる限り精査をしていきたい。

つぎに、素案の6小中一貫教育校の選定と今後の展開について、意見をいただき、たたき台の議論を終えたい。次回は、新しい内容を入れ、必要な修正を加え、答申の原案または基本方針の案として文章化を図っていききたいと思う。また、素案の全体的なことについて

ても、何かあればお願いします。

まず、小中一貫教育校の選定であるが、どこの学校をモデル校にするのかについては、率直に言って考え込んでしまうところがある。1つ目は児童・生徒の入学者が減少している学校を選定の対象にして考えたらどうか、2つ目は一貫教育の効果が期待できる学校を選んだらどうか、3つ目は施設の形態等を踏まえて選んではどうかということである。子供の数の減少、施設形態、通学区域の整合性のところはそれなりにわかるが、2点目の「効果が期待できる」というところはなかなか難しいところがある。

具体的にこういう学校であれば良いのではないかという意見があればお願いします。教育委員からは、開発的な研究に取り組めるような学校はどうか、という意見があったが、これも先生方の熱意、保護者の方、地域の方から我が校でという意見をいただく中で、やっていくことになるのであろうか。

上石神井小学校と上石神井中学校のように研究校としての実績があるといった理由で選んでいくことになるのかなと事務的には考えている。そうは言っても、103校の中からどのように2校を選んで1つの小中一貫教育校を設置するのかということがある。当然1つであるので、全区展開をどうしていくのか、他の学校との関係をどうしていくのかということについては、現在のところ、その成果を見て、他の学校でやっていくことの是非について考えていく。連携の必要性は各学校で認識があるので、成果として活用できるところは活用していく。教育委員会として、各学校をなるべく支援するような取組をしていきたいという趣旨のことがここには書いてある。

行政の責任で考え、判断していくということになるのかもしれないが、意見があれば是非いただきたい。

委員

私は、選定に1番関心がある。この3つの条件に加えて、4点目にやはり連携をやっている実績のある学校を選んだほうが良いと思う。先生たちの意識、意気込みが違うと思う。それぞれの学校で伝統があって、それを大事にしていると思うが、さらに小中一貫のカリキュラムを入れていくわけだから、そこはうまくスッと入るような下地がないと難しいと思う。教育委員会の大きな援助と校長のリーダーシップがあれば、子供たちに夢を持たせられるような小中一貫教育校ができるのではないかと思う。

是非、連携の実績のある学校を選んでいただくと良いと思う。

委員

私は、今回やらせていただいて強く思ったことは、先生方の小中連携というか、異なる学校文化がある中で、お互いを理解し合うのに結構時間がかかるということである。したがって、小中連携を実際にやって、その良さを実感できたという先生方が多くいる学校は良いと思う。可能かどうかわからないが、小中連携の良さを実感できた先生方をどこか1

か所に集めたらどうか。校長はすぐに対応できると思うが、先生方は経験があったほうが良いと思う。

委員

この内容で検討いただき、方向性、内容がある程度固まった段階で人事を扱う。たとえば、小学校高学年の算数、理科、英語の授業に、中学校の専門性の高い教員を配置することになる。小中一貫教育校になる1、2年前から小学校と中学校の免許を持っている教員を兼務発令として、順々に人数を増やしていく。最終的にそういうことをやるのだから、今のうちから研究をしてくださいといった啓発、意識付け、人的配置を徐々にして、体制を整える。いきなりやりなさいと言われても無理だと思っているので、十分時間をかけて段階的に意識を高めていくことが必要であると認識している。

委員長

選定の基準という考え方と選定した学校の小中一貫教育校としての条件整備との両側面があると思う。後段については、当然やっていかなければいけない。準備のこともあるので、意識の高い学校を選ぶということは、2番目の一貫教育の効果が期待できるという中にも入ってくるのかなという気がする。

委員

保護者や地域が納得する要因という観点で考えると、この3つの事項だと「うちの学校こそ、うちの地域こそあてはまるのではないか」と思う方がたくさんいると思う。実績のある学校と限定することで、ある程度絞り込むことができ、期待感が先行することによる不満が出にくくなるのではないかと思う。

委員長

あちこちで手を上げていただくのは、うれしい気持ちもするが、すぐに一遍にできないということがある。一方で、「いかがでしょうか」と聞いて、強く反対されるのも辛いところがある。

事務局

第3回推進委員会の際に配布した小中一貫教育校の選定に関する資料を参照願いたい。佐賀市立芙蓉小・中学校を選んだ5つの理由の中に、「小中連携の取組の実績があること」という項目があった。また、三鷹市でも3つの選定理由の中に、「小中が連携した教育のあり方について、本市の研究奨励校の研究実績を有する学校を含む地区であることが望ましい」という項目があった。したがって、練馬区においても、小中一貫教育校を選定する際の項目として、非常に参考になると思う。

委員長

教育委員からも意見をいただいている。また、推進委員会を運営するにあたって集めた資料を参考にして、答申の中で新しく入れ込めるものがあれば入れていきたい。少し整理をして、最終的に、確認をいただければと思う。

他のところで気づいた点があれば、意見をいただきたい。

委員

一般の方は、小中一貫教育校という言葉から、中高一貫教育校のようなエリート校というイメージを受けるのではないかと思います。この会議に参加することにより、そうではないということがわかったが、初めに素案を見たときに、そのことがすぐにわかるような表現があると、誤解を生まないのではないかと思います。

また、ここであげている内容は、小中一貫教育校だからこそというよりは、どの学校にも必要なことである。小中一貫教育校だけが特別なのではなく、小中一貫教育校を作ることによってその効果が表れやすくなり、そこで得られた成果を取り入れていくことにより、練馬区全体の小学校、中学校にとって良い成果が生み出されるのだという説明が先にあると、受け入れやすくなると思う。

委員長

そのようにしなければいけないと思っているが、なかなか難しいところはある。

今の話に関連すると思うが、資料4の説明を事務局から願います。

事務局

(資料4に基づき説明 省略)

委員長

参考にということなので、お目通しいただければと思う。

P T A活動についてのまとめは、学校が作ったのか。それともP T Aの方も入ってまとめたのか。

事務局

執筆に関わったのは、教員である。

委員長

一応、学校側がまとめたものであるのか。

事務局

そのとおりである。

委員長

品川区は進学を重視するのではなく、表現が適切かどうか分からないが、普通の子供の底上げをねらいとしている。練馬区でも同じ考え方で取り組んでいきたいと考えている。

委員長

終了予定時刻になった。

今回は、基本方針案のたたき台を基に、意見をいただくことになるかと思うが、今後のことも含め事務局から説明をお願いします。

事務局

今回は、2月7日(木)午後1時00分から3時00分まで教育委員会室で予定している。

また、予備日として3月5日(水)を設定させていただいたので、ご予約くださるようお願いする。

委員長

2月7日にまとめが難しければ、3月5日にお集まりいただくということをお願いします。

それでは、第5回の推進委員会を終えさせていただく。

どうもありがとうございました。